

アイデンティティ危機における自分自身への違和感から、 アイデンティティを再考する

小沢一仁 ^{*1}

Rethinking of Identity From Unfitted Feeling to Oneself in Identity Crisis

Kazuhito OZAWA ^{*1}

The question of "Who am I?" is asked by those who have been in Identity Crisis (Erikson, 1959). When the question is raised, they ask to themselves and find an unfitted feeling. Because a person loses criteria for accepting oneself. It is regarded as the criteria of identity. The above is related to that "psycho-social prototype" (Erikson, 1959). He clarifies what is right, what is wrong, who is right and who is wrong. Further more "psycho-social value" developed by Ozawa (2003) indicates individuals what you are, what to do and how to live in a society. From the existential perspective, the criteria of identity are utilized for the person to accept oneself who was born and grew up somewhere, lives now somewhere, and will live somewhere. In adolescent, the person may lose their criteria of identity through doubting one's criteria that have been cherished since childhood and being denied by others. Kawai (1980) pointed out that the recent public initiation rite for twenty years old people in Japan has lost a true meaning. Therefore, young people who even attend the public initiation rite cannot become independent for living in a society. The public initiation rite is no longer an opportunity to provide the criteria of identity with them to live as adult people in a society. Kawai (1980) mentioned that young people must try a personal initiation rite by themselves and for themselves, to enter adulthood. That personal initiation rite is also considered to be the "role experimentation" by Erikson (1959). Young people are required to seek out the criteria of identity of revealing how to live, who they are, and what they are as adults in a society. Through the "role experimentation", they quest "psycho-social value" that clarifies what you are, what to do and how to live in a society. The research reveals that no one obtains an existential confidence to accept oneself that was born and grew up in some place, lives now some place, and will live some place in the future, without having real and actual "ibasho", a place in a society where we commit to do something and meet other people.

^{*1} 東京工芸大学工学部基礎教育研究センター助教授
2004年9月10日 受理

1. 「私は誰か？」という問いかけを起点にアイデンティティ危機に迫る

(1) 「私は誰か？私は何者か？私はどこから来たのか？私はどこへ行くのか？」という問い。

① アイデンティティ危機における「私は誰か？」という問いを本論の起点にする理由

「私は誰か？私は何者か？私はどこから来たのか？私はどこへ行くのか？」という、この問いかけは、怪奇小説「フランケンシュタイン (Shelly.1831)」のモンスターが発したものである。

アイデンティティ概念の提唱者であるエリクソンは、第二次世界大戦への従軍という危機的状況におかれた者が、「私は誰かわからない」という問いを発したと述べている (Erikson,1959)。そして、このことから、アイデンティティ危機という概念を提唱したという。

このモンスターの自分自身への問いは、まさに、アイデンティティ危機における問いである (小沢,2004)。

本論では、いきなりアイデンティティとは何かという議論をすることはしない。それは、個人の実感とかけ離れた抽象的な議論になってしまう危険を避けるためである、そこで「私は誰か？私は何者か？私はどこから来たのか？私はどこへ行くのか？」(以下「私は誰か？」とだけ表記していく)というアイデンティティ危機を象徴する問いを、起点として展開していきたい。そこから、アイデンティティとは何か、言い換えれば、アイデンティティをどう捉えるかについて、再考していきたい。

「私は誰か？」という問いを起点にして、本論を展開するのも、この問いは人が生きている具体的状況から発せられるものだからである。この問いを発した者は、切実にこの問いへの答えを求めている。そこには、生きている人間がいる。だからこそ、アイデンティティという概念を、この問いを起点にして考えることは、言葉という抽象的な論理でアイデンティティを考えながらも、生きている人間の具体的状況とのつながりを保つことができる。また、筆者の個人的実感から言えるのは、アイデンティティ概念とは、すべての人に当てはまる概念ではないと

いうことである。では、どんな人に当てはまる概念かという、この「私は誰か？」という問いをもった者である。つまり、アイデンティティ概念は、「私は誰か？」というアイデンティティ危機という体験を内包している概念である。このため、「私は誰か？」という問いを持つ体験がないと、アイデンティティ概念を、実感として理解することは難しい。いかなる、人の心についての概念も、その概念の提唱者と同様な体験をした者にしか当てはまらないのではないか。

本論では、個人的体験、具体的状況にもとづく「私は誰か？」という問いから、アイデンティティ概念を論理として明確にすることをめざすのであるが、このことによってこそ、「私は誰か？」という問いを発する体験を共有しない場合、そして、実感としてアイデンティティ概念を理解できない場合でも、理論展開として理解する糸口を提示することができると考えられる。

② 竹田による現象学的方法を用いる

そもそも、「私は誰か？」と自分自身を問いかけること自体、日常的なことではない。人は、いつも自分自身が誰かと、問いかけたりしないものである。そして、記憶喪失にでもならない限り、人は、自分は誰かを知っている。どこで生まれ、どこに育ち、どういう名前で、どんな人間かは、自明で当たり前のことである。その自分自身を問うということ自体、まれなことである。

逆に、思いもよらぬ対象を、問うということはある。しかし、当たり前のことを問うということは、まったくまれなことである。この当たり前のことを問うということ、どう考えたらいいだろうか。日常生活の中で、身近で当たり前のことを問うということは、どうして扱ってはいけないのだろうか。

ここで参考になるのは、竹田(2004)による、現象学的方法である。この方法は、主観の内に「確信成立の条件を明らかにする」ことであるという。このことを、竹田は、「本質観取」と呼んでいる。我々が、ある確信を持つ。竹田がよく用いるのは、目の前にリンゴがあるという確信を持っている例である。竹田によると、現象学的方法では、「目の前にリンゴが存在しているから、目の前にリンゴがあるという確信が生じている」という見方をしない。逆

に、「目の前にリンゴがあるという確信があるから、目の前にリンゴが存在すると思うのである」という見方をする。つまり、外界にある事物の存在が、我々にある外界の事物を確信させるのではない。逆に、我々の外界の事物への確信が、外界の事物の存在させるというのである。

そして、我々の外界の事物への確信は、いかなる条件で成立しているのかを明らかにすることが、「確信成立の条件を明らかにする」という現象学的方法である。

この方法の利点は、心理的現象を外界の状況によらず、また、様々な概念に当てはめてしまうという方法にもよらないで、明らかにしていくみちすじがつけられることにある。

③ 違和感と納得感という確信

さて、では、「私は誰か？」という問いかけに、現象学的方法である「確信成立の条件を明らかにする」を用いるとどうなるか。

「私は誰か？」という問いかけには、いかなる確信、言い換えれば、いかなる実感があるのだろうか。生活している中で様々なものに対して、「これは違うなあ。」とか、「これはしっくりこないなあ。」という感覚を持つことがある。例えば、ペンを持つと、「このペンは書きにくいなあ。」とか、「この服は肩が凝るし、着にくいなあ。」とか、「この靴は靴擦れがして痛い。」という実感を持つ。このような実感は、我々が確かに感じられるものである。そこで、その実感に「違和感」という言葉を当てはめてみる。

例えば、「このペンはもちやすい。」とか、「この靴はいくら歩いても疲れないう。」とか、「この服の肩

の感じが着やすいなあ。」とか、服やペン、靴など身体に触れるものは、下着のCMのような表現を使ってしまうが、フィット感がどうか、しっくりくるかを生活していく上で人は敏感に感じる事ができる。

「私は誰か？」という問いかけをするときには、自分自身にしっくりくる感じを持つことができないのであり、違和感を持ってしまっていることが見い出せる。

アイデンティティ危機におけるこの違和感に関連して、西平直(1993)は、「ズレ」といい、溝上(2002)は、「差異」という言葉を用いている。意味は同様であるが、筆者は、主観的な実感を重視して、「違和感」と捉えている(小沢,2003)。

では逆に、自分自身への「違和感」とは正反対の実感とは何か。エリクソンは、アイデンティティを得たときの感覚として、「これが本当の自分だ。」という W. James の言葉を引用している(Erikson,1959)。つまり、「これが本当の自分だ。」という実感は、「私は誰か？」という自分自身に対する「違和感」の正反対のものであり、これは、自分自身に対する、フィット感、言い換えれば、「納得感」とであるといえる(小沢,2003)。

以上まとめると、アイデンティティ危機における「私は誰か？」という問いかけをする場合、自分自身へに違和感がある。逆に、アイデンティティを得たときの感覚である、「これが本当の自分だ。」という実感をもった場合、自分自身への納得感がある(図1を参照)。

アイデンティティ危機	←→	アイデンティティを得たときの感覚
「私は誰か？」という問いかけ	←→	「これが本当の自分だ。」という思い
自分自身に対する違和感	←→	自分自身に対する納得感

図1 違和感と納得感の対比

(2) 自分自身への違和感～自分自身とは何か

では、「自分自身」への「違和感」における「自分自身」について(2)で考えていこう。次の(3)では、「自分自身」への「違和感」における「違和感」について考えていく。

① 自分自身とは何か～人生の道のりにおける居場所の中の自分～

竹田(2004)が現象学を語る仕方を用いてみると、目の前に、コップがある。リンゴがある。目を上げると、部屋の壁がある。窓の向こうに、空がある。このように、外界としての対象を自分は見つめている。では、もう一度、視線を手元に移して、自分の手を見る。手相と言われる手のひらの線を見てみる。ついでに、肩に触れる。自分が肩がどれくらい力が入っているかを確認する。ここで、自分の視線は、目に映るものではなく、自分の肩がどれくらい力が入っているかという肩の力加減が、対象となっている。

まず、見つめる対象を、今こうしてこの文章を読んでいる自分に移してみる。この自分は机の前であったり、電車の中であったり、自分の様々な生活上の居場所のひとつにいまいる。このように、日常生活の中ではそのときどきの居場所の中に自分はいるのである。このように見る見方を、日常生活の視点とすることができる。

そして、自分は、今生活上、様々な居場所をもつ(小沢,2003)。学校、職場、趣味の場、サークル、家庭、友人、等々。そして、これらすべての居場所をもつ自分がある。このような見方は、現在における自分

自身の生活全体を見つめる視点に立つものである。

さらに、今こうして生きている自分は、過去に、あるところに生まれ、親の元、ある地域で育ち、様々な経緯の中でここまで、育ってきた。これから、将来へ向けて、様々な居場所を探し失い得ながら、生涯にわたって生きていくだろう自分を見つめてみる。このように、こうして生きている自分とは、エリクソンがライフサイクルという言葉で示したように(Erikson,1959)、過去から現在そして未来という生涯にわたって生きている人間としての自分でもある。このような視点は、エリクソン(Erikson,1959)のいう生涯発達という人生の道のりを歩んでいる今の自分ということから、生涯発達の視点、「ライフサイクル」の視点にたつとすることができる。

例えば、エリクソンが示した心理社会的発達段階に従って言えば、子ども時代という児童期に生きている自分、青年期という子どもと大人の間の人生の道のりを歩んでいる自分、成人期という社会の中で大人として生きている自分、中年期という身体的にも社会的にも峠にさしかかり指導的立場で生きている自分、老年期という人生の後半に自分の人生を締めくくる時期を生きている自分。生涯発達の中で人生の道のりには、それぞれの時期に特有の段階があり、その道のりを生きている自分がある。

そして、この時代にこの社会にこうして生まれ生きている自分がある。それは、この時代にこの社会に生きている、たった一人しかいない、こうして生まれ生きているという宿命まで含んでいる自分である。このように、自分自身を捉える見方を、実存的視点とすることができる(図2を参照)。

自分自身への違和感や納得感



その自分自身とは



そのときどきの居場所の中の自分 日常生活の視点



社会の中で生活全体で居場所をもって生きている自分 生活全体を見渡す視点



誕生から死まで生涯の道のり(発達段階)を生きている自分 ライフサイクルの視点



この時代にこの社会に生まれ生きているたったひとりの自分 実存的視点

図2 自分自身とは何か

② 概念的な検討～アイデンティティを自分が自分であることと捉える

エリクソンはアイデンティティの感覚を、自分の斉一性と連続性(sameness and continuity)を自分も確信し、他者からも承認されているという感覚と述べている(Erikson,1959)。そして、斉一性(sameness)は空間的なものであり、連続性(continuity)とは、時間的なものであると述べている。つまり、斉一性とは現在の社会的、つまり他者との関係における自分を指し、連続性とは誕生から死までのライフサイクルの中での自分のことを指す。

さて、自分自身に対して、同じであり(sameness)、つながっている(continuity)ということはどういうことを指すのか。

まず、アイデンティティという言葉は、そもそも、何かと何かが同じことを意味する。それを個人に適用すると、身分証明書のように、そこにいる人が、どこの誰かである人であることを示すものである(西平直,1993)。心理学用語のアイデンティティとは、まず単純に言えば、「自分が自分であること」、「私が私であること」と捉えることができる(小沢,2003)。アイデンティティとは、自分が自分であることであり、前者の自分と後者の自分が同じであり、イコールで結びつけられること、つまり、自分＝自分を示していると捉えることができる。先に見たように、イコールであると感じることを、違和感と言うことができる。

では、前者の自分と後者の自分とは、それぞれ何を指すのか。筆者は、前者の自分は「意識としての自分、主観としての自分」とし、後者の自分とは「この時代にこの社会にこうして生まれ生きている人間としての自分」のことであるとしてきた(小沢,2003)。この捉え方は、アイデンティティを問題にする論文上では、概念を言葉として表現するという手法を用いるので、問題はないと感じていた。しかし、専門用語を使うという手法が、生きている人間との隔絶を現しているのではないかと感じることもあった。

それは、個性をテーマにした市民講座で、一般市民を対象に、アイデンティティについて語ったときに初老の男性から、「主観としての自分、意識としての自分とは、何ですか？」という質問を受けた。

筆者にとっては、言葉を扱う専門家として、意識とか、主体とか、見つめる自分という言い方で、答えたのであるが、その男性には、理解してもらえなかった。この体験は、主観としての自分、見つめる自分を対象化して言葉として表現することの問題を感じたのである。

つまり、自分が自分であるとは、こうして生きている自分のことを自分が見つめているということを示している。この表現を使って、前者の自分と後者の自分に分けることは、概念という言葉で実体化して表現するという手法を用いているのであり、そのために便宜上、前者と後者それぞれの自分と呼んでいるに過ぎない。

西平(1970)は、全生活空間という見方を提示し、個人を生涯に渡って図式化してみる方法を提示しているが、それに対して上記に示したことは、自分自身をいくつもの視点からそれぞれに捉えることを段階的に示したものである。

つまり、前者の自分が後者の自分であるときは、様々な視点で「自分自身」のことを捉えることを指す。日常生活の視点では、そのときどきの居場所の中の自分がある。そして、生活全体を見渡す視点では、社会の中で生活全体で居場所をもって生きている自分がみえる。そして、時間的に過去と未来にまで視点を延ばすと、ライフサイクルの視点で、誕生から死まで生涯の道のり(発達段階)を生きている自分がみえる。さらに、自分がこういう自分として生きている宿命という実存的視点から、この時代にこの社会に生まれ生きているたったひとりの自分がみえるのである。

(3) 自分自身への違和感と納得感～そのもとに何があるのか

次に、「自分自身」への「違和感」についての「違和感」について考えていこう。

①違和感が生じる、その根底にある基準

違和感の根底には、暗黙の基準の喪失がある。違和感が生じるとは、潜在的に今まで持っていた基準では、理解できず捉える基準を失ってしまっているのである。このことは、非常に重要である。

例えば、目の前に物がある。これは、ペンだ、本だ、ノートだと言える。しかし、今まで見たことも

ないような物があるとする。すると、それを捉える基準はない。道具なのか、装飾品なのか、食べ物なのか、生き物なのか、全くわからない場合、「これはいったい何か？」という問いが生じる。

目の前に他人がいるとする。どこの誰か名前も知っていると。しかし、自分の全く理解できない言動したとする。その言動は、いままで見たこともないため、その言動を捉える見方、その言動の善し悪しを捉える枠組み、基準をもっていないから、理解できないのである。つまり、これまでの自分の持っている人を判断する基準では、理解できない言動をする他者に、「彼は誰か？彼は何なんだ？」という問いかけを發して、彼に対して違和感を持ってしまうのである。

同様に、いままで持っていた基準を喪失してしまったとき、自分自身のことを捉えられない、理解できない。このときに、「私は誰か？」という問いが發せられるといえる。つまり、自分自身への違和感を持ったときには、これまで自分自身を捉える基準を失ってしまっているのである。ここまで語ってきた「自分自身への違和感」は、「私は自分のことがちょっと嫌みたい・・・。」というような軽い感じの気持ちを指しているのではない。自分のことがわからないという切実感に迫られての「私は誰か？」という問いかけが生じるほどのものである。そのくらい切実に感じている自分自身への違和感においては、自分自身を捉えていた基準の喪失があることをここで示したのである。

②自分自身を捉える基準についての概念的検討

この自分自身を捉える基準のことを、考えていこう。

エリクソンの記述の中で、この自分自身への違和感において失われた基準に関係するものは、「社会的プロトタイプ(Erikson,1959)」であると考えられる

(小沢,2003)。この社会的プロトタイプは、エリクソンによれば、ある社会の中での善悪の基準である。つまり、何が理想で、何が悪か、を示すものである。エリクソン(Erikson,1959)は、アイデンティティ危機に陥った者の葛藤において、この社会的プロトタイプが問題になっていることを示している。

筆者は、エリクソンのいう社会的プロトタイプを、個人が自分のライフサイクルという人生の道において社会の中での自分自身を捉えるという基準として捉え、「心理社会的価値観」と言い換えた(小沢,2003)。また、基準という点を強調して、「心理社会的価値基準」または、単に「価値基準」と呼んでもいい。主観的な実感に基づいて日常用語で言えば、この「心理社会的価値基準」とは、「社会の中で人生の道のを歩んでいる自分が何をしてどう生きたらいいか？」という方針、指針、方向性を示すものであるといえる。つまり、先に述べた、自分自身を捉える視点のうち「ライフサイクルの視点」で捉えると、自分自身への違和感のもとになる基準を「心理社会的価値基準」であるといえることができる(図3を参照)。

さらに、自分自身を捉える上で実存的視点に立つと、こうして生まれ生きている自分自身を捉える基準を、「実存質の評価基準」という言葉で表すことができる。つまり、こうして生まれ生きている宿命としての自分自身が、自分自身を捉える「実存的価値基準」を見失ってしまったとき、自分自身への違和感を持ち「私は誰か？」という問いを發せざるを得なくなるといえる。「実存的な評価基準」とは、日常用語で言えば、こうして生まれ生きている様々な宿命をもって自分自身は「この人生を生きる上で何を願うか？」を示すといえる。

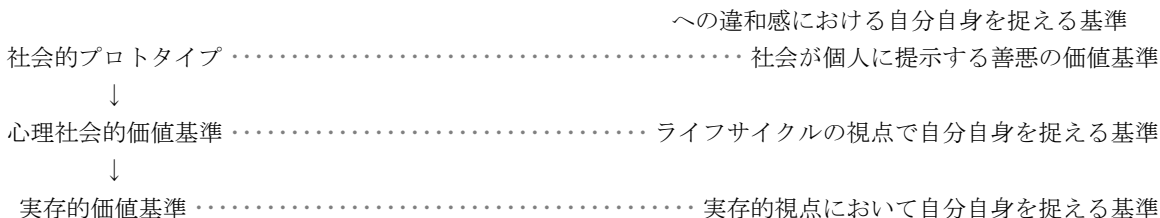


図3 ライフサイクルと実存的視点でみた自分自身

2. 青年期におけるアイデンティティ危機 において自分自身への違和感を考える

さて、今まで見たことを、ライフサイクルの中の青年期に当てはめて考えてみよう。

(1) 青年期において考える

①青年期におけるアイデンティティ危機

誕生時の乳児にとっては、独力では生存できないので、命綱としての親（養育者）の愛情は生存のために必要である(小沢,2003)。つまり、親からの養育を必要としなくなるまで、親からの承認こそ、子どもにとって生存のために必要なものである。そして、親からの承認を得るために、親の価値基準を取り入れていくと考えられる。

青年期において、教科書的に言えば、身体的変化・心理的变化・対人関係における変化・置かれている社会的状況の変化が生じる。これらの変化とともに、社会的な差別や偏見という他者からの否定や拒絶をきっかけとして、自分自身への違和感が生じることがある。また、他者との出会いや現実の壁にぶつかることによって、これまで子ども時代に持っていた価値基準についての疑いが、自分自身への違和感を生じさせることもある。いずれの場合でも、「私は誰か？」という問いかけである自分自身への違和感のもとをたどっていくと、自分自身を捉える価値基準の喪失があると考えられる。

青年期に特徴的な心理社会的価値基準は、どのように現すことができるか。子どもから大人への過程をたどっている自分がある。つまり、「社会の中で自分は大人としてどう生きたらいいか?」、「自分は社会の中で大人として何をして生きていくか?」に答えることができずに、ライフサイクルの中で大人として自分自身を捉える基準を失ってしまうとき、「私は誰か？」という問いかけが発せられると考えられる。

さらに、ただライフサイクルの中での心理社会的価値基準だけではなく、自分自身がこうして生まれ生きている人間として生きていることの宿命に接して実存的な視点に立ってしまう場合もある。自分が生きている生涯の中で、さらに自分の宿命の中で、何を願うかという実存的価値基準も問題になると、アイデンティティ危機はさらに深刻な事態となる

だろう。

②アイデンティティ危機の中で

自分自身への違和感が生じ自分自身を捉える基準が失われたとき、どうするか。例えば青年期においては、子どもから大人になっていく過程、学校から社会へと出て行く過程の中で、「社会に出て自分がどう生きるか?」という問題が生じる。これは、心理社会的視点、ライフサイクルの視点における問題である。さらに、こうして生まれ生きている自分自身を納得して受け入れるという実存的視点において、この青年期という過渡的の時期において、「自分の人生に何を願うか?」という問題にも直面することがある。

発達的に考えると、子ども時代は誰しも自分自身を捉える価値基準をもっていたといえる。それは、親からの承認されることである。その子ども時代を通して持ってきた価値基準は、親の影響や学校の中での影響を受けて持ってきたものであるが、青年期になると、そのようなこれまで自分が持ってきた価値基準に対して、違和感を持つことがあり、疑いを抱くを得なくなり、どうしたらいいか迷うことがあるのである。

(2) 現代の形骸化した成人式から考える

①河合による成人式の形骸化の指摘

ここ最近、成人式で若者が事件や騒ぎを起こすようになったという報道がなされている。しかし、それ以前から、各地方自治体の様々な努力にもかかわらず、河合(1980)が言うように、現代の成人式は形骸化している。つまり、成人式に出ても大人にならない。このことは、誰もが知っているのではないか。それは、成人式に出席する青年にとってもである。

筆者は、大学で学生にこのように講義する。「いいえ、成人式に出ることによって大人になる自覚が生まれる。」になると言う学生もいる。しかし、大部分の学生は、成人式に出ても大人にならないことを知っている。そんな中でも、成人式には出席するという学生が多い。なぜか。「同窓会だから。」と答える。

このような同窓会としての意義しかなくなった形骸化した成人式しかない中で、どの様に子どもから大人になっていったらいいか。河合は、現代社会は成人式という子どもから大人への通過儀礼が失われていると言いこのような中で、青年は一人一人

の自分自身のための大人になる通過儀礼を、成人式を行わなければならないと述べている。

では、どんな体験が、青年自身が行う自分自身への成人式となりうるのか。河合は、文化人類学の知見をもとに、機能している成人式と同じプロセスがあるという。既にかいたことであるが再度提示しよう(小沢,1992)。

- ・分離～親から離れる、子どもの自分から離れる
- ・試練～これまで試したことないことを試みる
- ・再生～大人としての自分に生まれ変わり他者から承認を受ける

そして、青年がどのような活動をしようとも、このようなプロセスがあれば、それは自分が自分のために行う自分の成人式、通過儀礼となりうるというのである。

ただし、河合は、この青年自身が行う、通過儀礼について以下の点も指摘している。

- ・失敗もあり得る
- ・一度では済まない
- ・子どものままで生きたいというならばそれもよし

② 現代の形骸化した成人式に替わるものとしての役割実験

エリクソンが述べた「役割実験」とは、アイデンティティ拡散状態という自分自身が不安定になった状態から、一時に免れようとして試みる活動を示している(Erikson,1959)。

例えば、学生であれば、部活に過剰に熱中すること、スポーツに過剰に熱中すること、趣味に過剰に熱中することは、エリクソンは社会の枠組みにはいるまでの社会的遊び(Erikson,1959)という適応的な意味合いで述べている。しかし、河合(1980)の指摘するような通過儀礼の3つのプロセスを辿ることができれば、一見どうでもいいことへの過剰な熱中は、通過儀礼となりうる。つまり、エリクソンが指摘する役割実験は、通過儀礼の3つのプロセスという見方を加味すれば、形骸化した成人式に替わりうるものとなりうるのであるといえる(小沢,1992)。

③ 役割実験における自分自身への違和感の一時的緩和

筆者は、居場所を<自分><他者><対象>の三角形のモデルとして捉えている(小沢,2003)。<対象

役割実験とは、居場所という言葉を用いれば、新しい居場所を探す試みであり、それは新しい対象、新しい他者、そして新しい価値基準を探す試みであると言えることができる。そして、役割実験は、暫定的ではあるが、一時的にアイデンティティ危機やアイデンティティ拡散状態から、自分自身への違和感を解消できるような居場所を求める活動であると言えることができる。ある居場所における対象へ熱中すること、そして、その居場所における他者から承認を受けることは、今まで持っていた自分自身への違和感を一時的にでも緩和することとなるだろう。つまり、ある居場所におけるある価値基準において、ある対象に打ち込みその中で価値基準において他者からの承認を得ることできれば、その価値基準における自分自身への納得感が得られる。よって、「自分は誰か?」という問いかけをするまでになってしまった、自分自身への違和感はここで一時的にも緩和されるのではないのか。

④ 役割実験における新たな価値基準を探すという意味

家庭や学校に居場所をもつ子どもから社会の中での居場所をもつ大人になる過程において、心理社会的価値基準である「社会の中で大人として何をしていくか?」という問題に取り組むことに困難を持つ青年もいる。そんな中で、自分がいかなる価値基準を持って生きるかを、役割実験を通して探すことができる。

つまり、これまで持っていた価値基準から、役割実験によって別の価値基準に触れたことで、この世の中には様々な価値基準があることを理解し、これまで自分が持っていた価値基準の相対化が生じる。つまり、思考の中だけで、いろんな見方が世の中に

はあるんだと思うことではなく、体験を通して実感を持ってある居場所を得ることを通して、これまでの自分にとっては絶対であると信じてきた価値基準から他の価値基準に触れることによって、別の価値基準もあるということが実感を持って理解することができるのである。このような体験なしに、価値基準の相対化、つまり、これまで自分が持ってきた価値基準を疑ったとしてもそこから離れることができることは難しい。

例えば、他者から、「別に学歴なんて、どうでもいいじゃない。」と言われても、学歴こそ「命」という、価値基準によって生きてきた青年にとっては、その言葉だけでは、学歴という価値基準を相対化することはできないし、そこから別の価値基準を探そうとしてもできない。そのためには、今までとは別の価値基準のある居場所を得ることが必要である。

（３）役割実験の危険と生かし方

最近の若者がよく使う言葉で、「やりたいこと」が用いられる。「やりたいことはこれだ。」「やりたいことがわからない。」このような思いには、個人の欲望が消費者として優先される側にまわり、自分の欲望に従って生きることを許されている状況において、自分が生きる方向も自分で決め自分の思いに従って生きることがいいことであるという見方があるといえる。

「やりたいこと」、「夢」は、現代の流行語であり、若者の心性に共感を持って受け取られるものであろうが、現実の中で、現実の居場所の中で確かめ、可能性が本当にあるかどうかを吟味し、さらに、自分の生きる上での願いを精練させていくことこそが重要であるといえる。

ときに、やりたいことがいつか心の中から突然湧いてくるかと思っているかのような青年もいるかもしれない。また、自分がやりたいことは絶対であり、それを疑ったり、吟味したり、確かめたりすることについては、必要を感じない青年もいるかもしれないが、それは全くの勘違いであるといえる。価値基準においても、役割実験の中で自分の心の内に問いかけて確かめていくという作業が必要である。でないと、世界中探し回っても自分の心うちを見つめないと何も見つからずに徒労に終わってしまう危険性がある。

また、役割実験において、価値基準は何でもいいからとにかく他者からの承認をほしいという場合は、騙されたり利用されたり自分を捨てたりするという悲劇が起こりうる危険がある。恋愛においても、過剰な異性からの承認を求める熱情は、社会の中で自分がいかに生きるかという自分自身への違和感に対処するという問題から逃げる危険性がある。

いずれにせよ、このような危険がありながらも、役割実験であろうが、恋愛であろうが、その中で、自分の心の内に、こうして産まれ生きている自分自身を納得して受け入れる実存的価値基準を問い続け、さらに、そのことを居場所を共有する他者と問いかけるという作業を他者との間で行えれば、新たな価値基準を探索するという作業の助けとなりうる可能性もある。

（４）自己理解と青年期以降

①自己理解の意義と青年期以降の問題

以上のように、自分自身への違和感の生じるもとにある価値基準をめぐって、アイデンティティ危機においては葛藤が生じているのである。よって、自分がこれまで持っていた価値基準とは何か、そして、その転換に迫られている自分は次にいかなる価値基準を得ていくかを自分を問いかけることは、まさに自己理解であるといえる。

自分自身の人生を納得するという目標は、いつの年代になっても、折に触れ自分を振り返る視点として、自分を見つめる視点として自分自身に保持され、自分の人生を確認しつつ生きるものとなる。青年期において一度徹底的に振り返っておくと、青年期以降様々な危機におかれても、振り返るということの視点は役に立つし、役割実験という居場所において自分自身への納得感を回復するという仕方も役に立つであろう。

さらに、青年期以降の成人期においては、青年期の試行錯誤で得た「社会の中で何をしてどう生きるか？」という心理社会的価値基準をまさに生きている時期である。さらに、「こうして産まれ生きている自分が生きる上で何を願うか？」という実存的価値基準においても、繰り返し問い続けていくことになる。この二つの価値基準は別々にあるものではなく、「社会の中で何をしてどう生きるか？」という心理社会的価値基準を考えながらも、「こうして産

まれ生きている自分が生きる上で何を願うか？」という実存的価値基準においてその試行錯誤をチェックしていくという姿をしているのではないか。

さらに、「社会の中でどう生きるか？」という心理社会的価値基準および、「こうして産まれ生きている自分が生きる上で何を願うか？」という実存的価値基準は、青年期においても、成人期においても、中年期においても、老年期においても問い続けられる問題である。その中で、自分が生きる人生という人間にまつわる一貫したテーマも確認できるのではないか。

②青年に対する大人としての意義

青年が通過儀礼に取り組むことについて、大人側では彼らの通過儀礼の祭司としての役割があるのではないか。ただ、固定的な価値基準があった時代ではないので、ことはそんなに簡単ではないのであるが、成人期、中年期にある大人は何も青年の行う通過儀礼に関わりはないと言うことはない。

自分自身が青年期の通過儀礼を経て成人となり、さらに成人期から中年期の通過儀礼を乗り越えることができれば、後輩である青年期にいる彼らの通過儀礼を見守る者になれる可能性がある。大人になったからもう自分は安泰というわけにはいかないのである。

成人期や中年期にいる者は、青年に対して当然自分の価値基準の押しつけても彼らの反発や無反応を買うだけではあるが、役割実験を通して疑いを経たきた確信は、青年に対する上で成人期や中年期にいる自分自身を支える自信となり、彼らに対峙する上での支えとなる。これがないと時代背景も違い、生きている状況も違う青年に対することは難しくなると考えられる。

3. まとめと課題

①役割実験から実存的視点を考える

ある居場所における他者からの承認は、一時的と言えども、「自分とは誰か？」という問いかけを発するまでになってしまった、自分自身への違和感の中で、これから社会に出て大人になっていくという過程の中で、こうして生きている自分自身という人間に対する、価値基準抜きにした、根源的な自信を与えてくれるものとなるのではないか。つまり、ど

ういう価値基準をもとに生きていこうと、自分はこの社会の中で自分という人間で納得感を持って生きていけるという実感である。「自分とは誰か？」という自分自身への違和感の中で、自分が自分であることの納得感を、社会の中でいかに生きるかという価値基準なしに、与えてくれる可能性があるのではないか。

言い換えると、実存在的な視点を持つこと、こうして生きている自分はたった一人しかおらず、こうして産まれ生きていることは宿命的なことである、このような見方をする事自体が、非常に厳しいことである。このような見方によって、人生を生きる上で自分が何を願うかという、「生きる上での願い」を見つめることは、非常に厳しいことである。役割実験における、あるひとつの居場所における実感は、このような実存在的な視点を持つことへの自信となり、支えとなる可能性がある。

つまり、役割実験において、体験したことで得た、根源的な自分自身への自信、実存在的な視点を持つこと、これまでの価値基準の相対化をもって、もう一度、実存在的な視点において、社会の中で何を生じていくかという心理社会的価値基準を探していくという作業に戻っていくことができるみちのりがあるのではないか。このことをさらに明らかにしていきたい。

②アイデンティティのダイナミズム

本論では、アイデンティティ危機における「私は誰か？」という問いかけから、自分自身への違和感を取り出し、さらに、その根底に「社会の中で大人として（青年期の場合）どう生きていったらいいか？」さらには「こうして産まれ生きている自分にとって何を自分の人生に願うか？」という実在的価値基準があることを明らかにした。このような自分自身への違和感も、自分自身への納得感を求めたいためのものである。

これまで自分を支えてきた価値基準を喪失してしまった場合や疑いを持ってしまった場合、何を目指して支えにして生きていったらいいかわからなくなる状態に陥る。これがアイデンティティ危機の状態であるが、その中でも、様々な居場所を探す役割実験に活路を見出すことができるのではないかと提案したものが本論であるといえる。それは、本論で見

たような新しい打ち込む対象や他者との出会いがヒントになる。そして、外界に対象や他者という居場所を探すと同時に、自分の心の内を見つめて、これまで自分の持っていた価値基準を明らかにし、新しい価値基準を探す過程も重要である。本論で述べたが、外界ばかりに探しても、自分の内なる価値基準を見つめないと自分にとっての確かなものを得ることはできない。なぜならば、竹田による現象学が示すように、居場所を得たという実感の根底にあるのは、外界にある対象でもなく他者でもなく、それらの対象や他者を重要であると捉える自分が持つ価値基準だからである。つまり、居場所の意味を与えるのは自分の中にある価値基準である。

そして、青年期以降も、自分自身を納得して受け入れる価値基準を見つけてからも、葛藤から自由になることはない。価値基準は固定的なものではなく、常に他者からの刺激を受けたり、現実の壁にぶつかりたりして、疑いを抱くを得ないものである。そのたびごとに、確認という作業が行われるのである。自分が得たこの価値基準でいいのだろうか？もっと別の価値基準はないだろうか？と。それは不断に続く葛藤の連続である。つまり、アイデンティティについて、エリクソンは生涯続く葛藤と解決の連続であると述べているが(Erikson, 1959)、その時点時点において、価値基準をめぐる葛藤と確認のダイナミズムが心の中でうごめいているといえる。

③宿命と絶対への危険性

さらに、アイデンティティの問題は、このように宿命を含む問題を抱えるので、その逆の絶対的な自分自身への肯定を求めてしまうのではないか。竹田(2004)は、現象学の解説の中で人間が＜超越＞を求めることを指摘しているが、自分自身への絶対的肯定を求めることは超越を求めることであるといえる。このことはまれにしか起こらないことである。しかし、時に沸々と宿命の反動として、社会の見方や世俗の見方を無視したり否定したりしたくなる思いをはらんでいる。そんな中では、極めて自己中心的な生き方をすることもあり、世俗の価値を否定することもあり得る。そこでは、自分自身に対して絶対的な肯定を求めることが重要な問題となっているので、自分を肯定すること以外の問題は、他の脇に追いやられる。しかし、この世で生きている限

りは、世俗という社会の中で生きていかざるを得ない。さらに、こうして産まれ生きている自分自身の宿命に対して、それが平凡であると、逆に過酷なものであればほど、その宿命を受け入れる際の葛藤がある。それゆえどこかで、自分自身の絶対的肯定を求め、日常生活からの脱出を求めるのである。そこに、アイデンティティが問題になることの危険性も飛躍もある。このように、誰しものが、たまたま産まれてきたこの宿命を持つ自分において、自分自身を自分自身が生きる人生を納得して受け入れたいという思いを持つだろう。アイデンティティとはこの思いのための概念であるといえることができる。

参考文献

- 1) Erikson, E.H. 1959 Psychological Issues : Identity and the Life Cycle. International Universities Press. (小此木啓吾訳編 1973 自我同一性 誠信書房)
- 2) 溝上 慎一 2002 アイデンティティ概念に必要な同定確認の主体行為 梶田叡一編 自己意識研究の現在 ナカニシヤ出版
- 3) 河合 隼雄 1980 大人になることのむずかしさ 岩波書店
- 4) 西平 直喜 1970 青年心理学序説 平安書院
- 5) 西平 直 1993 エリクソンの人間学 東京大学出版
- 6) 小沢 一仁 1992 人それぞれが創る物語 山添 正 編著 現代日本人のエコロジー ブレーン出版
- 7) 小沢 一仁 2003 居場所を得ることから自らのアイデンティティをもつこと 東京工芸大学工学部研究紀要第26号
- 8) 小沢 一仁 2004 コラム1 アイデンティティと居場所 谷冬彦・宮下一博編 さまよえる青少年の心 北大路書房
- 9) 竹田 青嗣 2004 現象学は思考の原理である ちくま新書
- 10) Shelly, Mary 1831 Frankenstein 1831 Reprinted 1996 W.W.NORTON & COMPANY. (森下弓子訳フランケンシュタイン 1984 創元 推理文庫)